

UrbanDesignLab. Magazine

2015.06.30 vol. 230



師の軌跡を辿って

L O O K I N G B A C K O N T H E T E A C H E R

北沢猛先生特集 第1弾

鈴木伸治先生を訪ねて p.4
優秀論文賞受賞!黒瀬助教インタビュー p.8

東京大学
工学部都市工学科/
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

今月の編集担当: 高橋舜 富田晃史

編集長: 今川高嶺

編集委員: 中島健太郎 高橋舜 中井雄太

黒本剛史 砂塚大河 富田晃史 王誠凱



Urban Designer

KITAZAWA Takeru

(1953-2009)



師の軌跡を追って

— 北沢猛先生特集 第1弾 —

都市デザイン研マガジン230号。小さな節目を迎えたマガジンでは、初の試みとなるリレー形式のインタビュー特集に挑みます。特集のテーマは、故北沢猛先生。北沢先生が亡くなられてから6年が経ちますが、研究室にいると日々いろいろな人が「北沢先生はね、…」と、北沢先生のことを口にします。一体どんな方だったのか、編集部では先生の7回忌にあたる今年、改めて北沢先生にスポットを当て、じっくりと北沢猛という人物に迫ってみることにしました。

初回のインタビューに伺ったのは横浜市立大学の鈴木伸治先生です。鈴木先生は北沢先生が助教授として大学に戻ってこられた際に研究室の助手を務められており、その後も横浜市で北沢先生と幾つもの仕事を共にされてきました。そんな鈴木先生は北沢先生について何を語ってくださいなのでしょう。今回は横浜市立大学にお邪魔し、鈴木先生にお話をうかがってきました。



鈴木伸治先生を訪ねて ―北沢猛先生特集 第1弾―

The Interview of Nobuharu SUZUKI in Yokohama City University
- The Feature of Prof.KITAZAWA Takeru 1st -

インタビュー当日は、午前中に横浜市大の方々に黄金町や金沢シーサイドタウンの鈴木先生が関わっておられるプロジェクトを案内していただきました。

午後から始まったインタビューは梅雨晴れの1日だったこともあり、屋外で行いました。インタビューでは鈴木先生の学生時代のお話から北沢先生との関わり、また今後の都市デザインの在り方にわたるまで多くのお話を伺ってきました。

(編集：M2 高橋)

＊

―紹介も兼ねて先生の学生時代のお話をお伺いしたい。なぜ京都大学の建築から都市工に進学されたのか。

学部の際は都市史が専門の西川幸治先生の研究室でしたが、大学院入試の年に西川先生が退官でした。そこで、都市工の知人に勧められて受験しました。事前に訪問したところ、渡辺定夫先生に「受

験してもいいけど(部屋が狭いので)席は無いぞ」と言われましたが、合格し、進学することになりました。でも進学が決まった直後に布野修司先生が京都大学に赴任されて、正直少し迷う部分もありました。

―学生時代はアメフトをされていたとのことだが。

そう、ほとんど勉強しませんでした。その時は、いま神戸大学の槻橋修(准教授)がキャプテンをやっていて、今でも震災復興支援のプロジェクトと一緒にやっています。因みに、最初に言った院進学時の都市工の知人というのがいま芝浦工大にいる桑田さんで、彼もアメフトをやっていました。

―院生のころは何をされていたのか。

92年に進学しましたが、M1の時には浦安の景観条例の調査を手伝ったりしました。この時が渡辺先生の時代です。

M1の途中で西村先生が東大に戻ってこられて、修士論文は西村先生に指導してもらい、そのまま博士課程に進学しました。博士課程の頃はミャンマーの調査をしていて、その後助手時代も含めて、カンボジア、タイなどで大規模遺跡の保存と都市計画の研究を一時期していました。

―その後、助手になられたのか。

95年に山田先生が亡くなられて、西村先生一人になり、その後助手に採用されました。一時期、原・西村研究室だった時代もあり、その時には原広司先生が学部演習の住宅地計画とか見に来ていました。演習で原さんにエスキスを受けたのは松田達さん。彼は確かそれがきっかけで、大学院で原研究室に行ったはずですが。期間としてはD2の6月から99年度まで5年弱助手をやっていました。助手になった当時は、学園紛争の影響か、外部からの委託研究をやらなかった時期



▲午前中、市大の学生さんに黄金町を案内していただきました

でした。学生もなかなか都市デザインを实践する機会がなく、西村先生と相談して、外部での実践の機会を求めることになり、千代田区的美観地区や、岩手のプロジェクトが始まりました。西村先生は明治大学にいらした時から地域での調査などされており、実際に現場を見ないと学生の手も伸びて来ないと判断されたのでしょう。その後、僕は二戸、久慈、釜石などに参加した後、美観地区で博士論文を書いて関東学院に移りました。

―北沢先生との出会いは？

まだ工学部8号館に都市工があり、当時院生として演習の手伝いをしていたのですが、講評会の時にゲスト講師として招かれた北沢先生に初めてお会いしました。その時の先生の格好が、からし色のシャツに、黒い細いネクタイ。サングラスをかけていて、公務員らしからぬ格好で驚きました。その後、西村先生が北沢先生を呼ぶことになるのですが、印象的だったのが、「海外だと、大学に行政の実務家の人が来たり、大学から行政や民間に転身したりする。日本もそういった形で人が動いていかないと行けないし、そういうことは東大が最初にやるべきだ」と西村先生に言われたことです。その後、97年4月に北沢先生が研究室に赴任されました。

―助手時代に北沢先生が関わったプロジェクト活動について。

赴任された直後にコンペをやったりしていました。岩手をはじめとして国内の研究室の調査はほとんど北沢先生と一緒に行っていました。海外では、ブータンの調査なども一緒に行きました。

―プロジェクトでの北沢先生の様子について。

地元の人と飲み会をやって宿舎に帰ってきてから、いきなり図面を揚げだしたりして、さあこれからだといって飲みながら作業する。物凄いタフな人だと思いました。あとから聞くと、市役所の時もそうだったらしく、とにかく帰らない、猛烈に仕事をする人だったらしいです。逆にそこが身体には良くなかったのではないかなとも思います。

―北沢先生と共にプロジェクトをやられていて印象に残っていたことは？

北沢先生は「アーバンデザインを实践する人間が大学にいないのは問題だ。研究だけしていても新しいものは生まれない。研究は起こったことを評価することが中心になってしまうので、何か起こったことを後付け的に評価しても新しいものは生まれない」という趣旨のことを、大学に移ってからずっと言われていました。

―実践という意味では、先生が黄金町のプロジェクトを始める際には北沢先生の言葉の影響がけっこう大きかった？

黄金町については、当初北沢先生は心配してあんまりすすめていなかったです。北沢先生に相談にいったら「あれは

大変だぞ。暴力団が絡んでいて、ちょっとやそっとじゃ進まない。相当に時間を使わなくてはいけないし、ほかにもやれることがあるんじゃないか」と言われました。ただ相談といってもやりはじめてから相談に行ったので、結局そのまま続けていった。最終的には応援してくれました。

現場のアーバンデザイナーであっただけではなく、ポリシーメイカーの資質があった

―北沢先生の都市に対する見方はどのようなものであったと考えているか？

ものの見方が西村先生と少し違いました。わかりやすい例だと、以前丸ビルの建て替えを巡る反対運動がありました。西村先生は180mの超高層が建つことに対して景観の面から問題提起をした。一方の北沢先生はというと「反対をしてそこから何を求めるのか考えなきゃいけない」という現実的スタンスでした。先生はみなとみらいの時に三菱と一緒に仕事をしていたこともあり、個人的に三菱の人とコンタクトをとるなど、少し違う見方をしていたと思います。実践的なものごとを進めていくには、現実的なアプローチが必要になる。なんだかんだ影響を受けていると思います。

また、先生は戦略的な動きができる人であったと思います。ゲリラ的な動きだけでなく、市の政策として組み立てて動く。単に現場のアーバンデザイナーであっただけでなく、ポリシーメイカーの資質があったのだと思います。フィジカルなデザインだけでなく、政策のデザインまでカバーできる人でした。



▲アーバンデザインセンター並木 (UDCN) の外観

ーアーバンデザインセンターについて、北沢先生とそういう話はあったか？

その頃は既に横浜にいたのであんまり聞いていないですね。その頃になると会うのはもっぱら横浜で、会議の後にバーに連れて行ってもらったりしたが、柏の話は出なかったし、あんまり印象に残っていない。

北沢先生自身は、そこで食えるのかどうか、そこがプロの受け皿になるのかどうかを考えていた

ー横浜市大が現在やられているアーバンデザインセンター並木 (UDCN) について、北沢先生のアーバンデザイン構想が活かされている部分が大きいのか。

特にアーバンデザインセンターに拘っているわけではないです。UDCK について言えば東大だからできる組織の強さがあるけれども、財政的、人材的に恵まれない場合は、違った作戦が必要になる。市大で言えば医学部があり、それとの協働が必要だったりします。UDCN は別のゼミが主体的に動いており、自分のところのゼミとは分けて活動している。UDCK には常勤の職員がいて、それが継続して張り付いていられるのは強みだと思います。北沢先生自身は、そこで食えるのかどうか、そこがプロの受け皿になるかどうかを考えていたと思いますし、プロフェッショナルなアーバンデザイナーが継続的に関わっていく、そういう仕組みを模索していたのではないかと思います。

ー北沢先生と田村明さんの関係について。

以前横浜の都市デザイン史の研究をやり、その関係で田村明さんに連続インタビューを行ったことがありました。この辺りの作業をやっていると思ったのは、北沢先生は田村さんの影響が大きいのではないかと思います。役所では少ししかかぶっていないけれども、インタビューを通して北沢先生が入庁する以前のことにについても理解を深めていったと思います。

単純に時代の先が読めていただけではなく、今時の言い方をすればイノベーターだった

ーインタビュー自体はそれで終わってしまった？

北沢先生が亡くなられた後、横浜の都市デザインに関わった人たちに手伝ってもらって、インタビュー集をまとめました。残念ながら、北沢先生に話していただくことはできませんでしたが、80 年代から始まる歴史を活かしたまちづくりなんかは北沢先生が中心に立ち上げたプロジェクトです。その周辺にいた人へのインタビューを通してみると、先生の理念に共感した人たちが、集まってきて、ひとつの大きなうねりになっていったことがわかります。単純に時代の先が読めていただけではなく、今時の言い方をすればイノベーターだったと思います。

ー行政から大学に移り、北沢先生に何か大きな変化はあったのか。

大学に来て色々考えることが変わったと思います。役所は部署があってすべき業務や予算が決まっています。その中でも都市デザイン室は新しいことをやっている部署ではあったが、そうした環境から大学に来た途端、制約条件がまったく無くなったという点が大きいと思います。東大に来てからは旧大野村、喜多方など、それまでのフィールドだった大都市とは違う文脈で仕事をするようになっていきましたし。あと、北沢先生は人の話をよく聞いていて、それをいろいろなカタチで取り入れていました。都市計画学会の 50 周年の時、北沢先生が中心となっている話を聞きにいく企画があったが、その時なんかもしろいろな人の話を聞いて自分の考え方をブラッシュアップしていく人でした。

ー市大のまちづくりコースについて、どのように構想されたのか？

横浜市立大学には建築学科もないですし、デザイン教育の基盤もないです。また、人口減少時代につくるトレーニングを積んでもしょうがない。今やそんなに工学的なハードを作る人材ニーズがあるとも思えないです。一方、まちづくりのソフトの部分を考えられる人材ニーズはあると思います。文系なので役所に行ったら事務職になりますが、まちづくりのことがわかっている事務職が大切だと思います。工学部では不動産のマネジメントや福祉のことを学ぶ機会はないですが、文系では、資格に関係ないので、そういった教育を行うことができます。市大には地方公務員になったり、田舎に戻って仕事をする学生が多いので、そう

いう人たちに役に立つ教育をしようという意図があります。

ー現在、学生を育てる立場として、学生にどういうことを求めているか。

何でもいいので、実践をするということをやって欲しいです。学部レベルでも、少しでもいいから現場を見るようなことをして欲しいです。社会の方が求めている人材は、講義室にいて本ばかり読んでいるような人ではないので、社会に出て接点を持って何かを感じることでできる人を育てたいです。

ー今後の横浜の都市デザイン・まちづくりについて。

北沢先生みたいな求心力がある人がいるから物事が動くと考えられがちだが、役所にもいろいろな人がいるし、横浜の場合は民間プランナーのレベルが高く、地域のことを熟知している専門家が多い。北沢先生も元を辿ると田村スクールとも言うべき人たちのネットワークの中で仕事をしていたと思います。次は北沢先生や国吉先生（元横浜市都市デザイン室長、現横浜市立大学特別契約教授）に影響をうけた世代が、いろいろなモノを動かしていくようになると思います。あと民間プランナーの話ですが、彼らは影の功労者。縁の下の力持ちとして支えています。一方で彼らの高齢化が始まってきていて、世代交代が始まったときにどうなるのが課題です。

ー今後の都市デザインに求められる役割について。

人口が減っていく時代に都市をつくることばかりやってはいけなと思います。都市計画の存在価値が問われていて、一部には不要論なんてものもある。そうした中では、都市のマネジメントを考えなくてはいけないのではないかと思います。北沢先生も 2002 年に「都市のデザインマネジメントーアメリカの都市を再編する新しい公共体」という本を出されており、都市デザインではなくてマネジメントが重要だという話をしている。作らない時代の都市デザインを考えなくてはいけない。パソコンで言うと、OS を書き換える作業とも言えるでしょう。

その時代に必要とされる都市の有り様を考えなければならない。空間のデザインから離れてしまうけど、生活の質やソフトを考えることが必要

ーマネジメントという意味では、どういったテーマが具体的にあるか。

例えば福祉との関係。横浜だと 2025 年問題というのが大きな課題で、団塊の世代が後期高齢者になる 2025 年に 65 歳以上が 100 万人、75 歳以上が 60 万人という時代になる。その時代に必要とされる都市の有り様を考えなければならない。空間のデザインから離れてしまうけど、生活の質やソフトを考える必要があると思います。

ー福祉の話というと、現在並木で健康まちづくりをテーマにしたまちづくりに取り組まれているが。

並木は北沢先生が市役所に入って最初にやった仕事です。当時はアーバンデザインの傑作と言われていたが、現在はあまり人気がないのが現状です。金沢シーサイドタウンは新耐震以降の建物ということもあり、ハードはいじれない。そうすると使い方を変えていくしかないのです。ハードな空間を変えれば良いという問題じゃない。ハードを変えて提案できればハッピーですが。大都市が抱えている状況はそこ。空間をつくることありきの都市デザインは厳しいと思います。

ーソフトな話の場合、ずっとそこと付き合っていくことが重要になってくるが、

そういうことが大学に求められている？

東工大の真野さんが対談した時おっしゃられていたのですが、立場は変わるがカタチを変えて関わっていくというやり方がある。地域にどう介入していくか、東大だからあり得るスタンス、市大だからできるスタンスがそれぞれあると思います。

一次の人を紹介していただきたい。

工学院大学の遠藤新さんはどうでしょうか。アメリカの都市デザインマネジメントなどは遠藤先生とかなり関わりが深いですし、北沢先生と一緒にサンフランシスコにも行っていた。東北のプロジェクトも実質的にやったのが遠藤さんです。北沢先生との直接的な関わりも遠藤さんはかなり長かったと思います。

＊

鈴木先生、お忙しいところ貴重なお話を聞かせていただき、誠にありがとうございました。

また今回、鈴木先生が手がけている黄金町と UDCN を案内してくださった、横浜市大の中西正彦先生、鈴木ゼミの大滝さん、島原さん、砂川さんにもお礼申し上げます。

第 2 回は、鈴木先生にご紹介いただいた工学院大学の遠藤新先生に話を伺います。次回もどうぞご期待ください。■



▲鈴木先生から研究室に本を寄贈していただきました！



黒瀬助教インタビュー -ブラウンフィールド研究の軌跡を紐解く-

Interview of Assistant Prof. Kurose, Tracing Back to The Research of Brownfield

2014年の日本都市計画学会の年間優秀論文賞に選ばれたことに始まり、今年2月には博士論文審査を無事通過された黒瀬助教。

黒瀬助教の研究の概要をごく簡単に述べると、工業跡地など、土壌汚染の存在や存在の可能性によって、再利用が困難となっている土地(ブラウンフィールド)の再生の実態を米国を事例に整理し、米国では都市計画・経済開発と、環境行政が連携して取り組まれるようになったことを明らかにしています。自治体の戦略は明文化されていないものもあり、論文化するのが難しいなかで、2006年、2012年の2度に渡ってヒアリングや現地調査を行いながら、自治体の取り組みの戦略性を明らかにし、日本のブラウンフィールド地域の再生に寄与している点が評価されて、年間優秀論文賞に選ばれました。

今回のインタビューでは、ブラウンフィールド研究のきっかけに始まり、日本の都市計画や都市工学科のあり方にまで話は広がりました。

(編集：M1 富田)

*
-ブラウンフィールドの研究をしようと思ったきっかけについて教えてください。

僕が修士の時に北沢先生が横浜市の参与をやられていて、東大のCOEの一環で横浜市内の京浜臨海部再生のプロジェクトが始まった。範囲としては横浜の西区から川崎との境界までかな。この時に初めて、工業地帯の再生・工場跡地を真剣に考える機会を得た。それとこのプロジェクトの一環で、M2の夏に北欧とドイツへヨーロッパの工場跡地の再生の調査にも行かせてもらった(その成果の一部はSSD100に掲載)。元々国や大きな機関が地方自治体をサポートする時にどう方法があるのかに興味があった。M1の時に、岡部明子先生の「サステナブルシティーEUの地域・環境戦略」を読んで、EUが構造基金でバスク地方のような国境地域や炭坑など工業が衰退地域を支援していることに興味を持っていた。そういうこともあって、M2の夏まではアメリカというよりもヨーロッパの方に興味があったと思う。国の補助

金頼みは問題だと国内では言われていたけれど、本当に厳しい状況に置かれた地域には、もう一度自立するための支援も必要だと思う。国や連邦政府といった大きな機関が地方自治体をサポートする時にどう方法があるのか、考えたいと思っていた。

-ヨーロッパからアメリカに関心がうつっていったのはなぜですか？

M2の夏の調査で訪れたストックホルムやハンブルグなど、ヨーロッパのブラウンフィールド再生事例はすごくきれいでアーバンデザインとしても優れていた。でも話を聞いてみると、自治体や開発公社の権限が強くて民間事業者を細かくコントロールできるから実現できたことだと分かった。自治体や開発公社がほとんどの土地を一旦買い上げて、土壌汚染も浄化して道路など基盤整備して民間に定期借地したり売却したりするというやり方。出来たあとの形は格好良いけど、これは日本ではできないと思った。自治体の力も強くないし。それでアメリカのことを調べ始めた。アメリカは2000年

頃に法制度の整備も進み、補助金も拡充されてブラウンフィールド業界も盛り上がっていた。M2の秋にマサチューセッツ州の再生事例を調査したが、工場の建物を住宅に再生したり、工業用の運河沿いに遊歩道を設けたり、小さな中学校を作ったりという非常に地味なプロジェクトだった。でももちろん、ヨーロッパの事例と都市の規模も違うのだが、中小の工業都市が生き残りをかけて努力している様子が伝わってきた。廃墟のような工場跡地を再生するために、連邦・州と自治体が泥臭く協力している様子を見聞きし、その仕組みが面白いと思った。今思えば、北沢先生の「都市のデザインマネジメント」の内容にも影響を受けて、多主体が協力して進める都市デザインに興味を持っていたのだが、なかでも環境行政の担当者が、地域の再生を熱く語る姿が印象に残った。

-インターンでモンゴルへ行くことになったので、モンゴルについて研究しようと思っていますが、海外の事例を研究対象とすることについてどう考えていますか？(砂塚)

やりがいはあると思うが、苦勞も多い

と思う。例えば、アメリカと日本では、人々の土地に対する考え方や人口密度が全然違う。そもそもの前提条件が違うのに、その研究は日本や他の地域で応用可能なのかと常に問われる。仮に、モンゴルが、日本のような廃棄物処理技術の水準に至ってないだけで、日本の技術を導入すれば解決するのだとすれば、研究するのは難しい気がする。でも恐らく技術導入だけでは解決しなくて、その地域の住民の価値観や、地形など、色々な要因を前提に議論しないといけない。その地域の人間ではないからこそ、見えることもあると思う。難しいけれど、外国人が研究することで見える視点もあるのではないか。

-米国について日本人が研究することで、どういう視点が与えられるのでしょうか？

制度の違いの背景にある物事の考え方の違いが見えやすくなるのかもしれない。外国から見ることで、対象とする事象を相対化しやすいことも利点かもしれない。日本だと再開発促進区のように、民間の工場跡地の再開発にあわせて、基盤整備を民間資金を活用して進める方法

が制度化されているが、アメリカではプロジェクトごとに様々な省庁の補助金を組み合わせて、事業化していた。環境法が厳しかった分、環境規制と都市計画の関係は、アメリカの方が進んでいるが、工場跡地再生の都市計画からのアプローチという面では、日本にも優れた事業制度があるように感じた。産業が転出したあと、地域再生を前面に押し出す欧州のやり方と、環境保護と都市計画の調整を進めてきたアメリカの方法は随分違うと思っていたが、アメリカの近年の取組は、地域全体の再生を強く意識している。

-海外よりもむしろ国内の、例えば伝統的な集落や街に関心は持たなかったのですか？

プロジェクトで喜多方や大野村に参加していて、日本の伝統的なまちに興味はなかったわけではない。ただ、所謂文化財のように、多くの人が大切だと考えている場所ではなく、あまり関心を持たれていない場所に興味があった。ブラウンフィールドはまさにそう。日本よりも海外の方が環境リスクと明示的に向き合う状況にあったので海外に関心を持った。

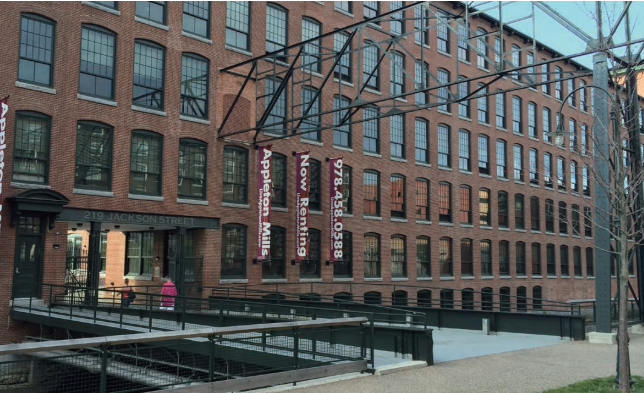
今から思い返すと、自分の出身が熊本



▲NY州 Buffalo 市の Union Ship Canal(1910年頃の稼働時：左、Buffalo 市所蔵)と公園として再生した様子(2014年：右)



▲マサチューセッツ州 Lowell 市の JAM 地区の再生事例 (廃墟化していた繊維工場 2005年：左)



とロフト型住宅として再生した様子(2014年：右)

県の八代市という工業都市であることも影響しているのかもしれない。駅の裏側に大きな製紙工場があって、思い描くまちの風景のどこかには煙突があるようなまちだった。小学校6年生までこのまちで過ごした。あと、喜多方プロジェクトでは、郡山や会津若松を通して、喜多方に行くのだけれど、どの駅の裏側にも工場があった。だから、自分にとっては、都市と工場は切り離して考えられないものだったし、海外の事例を見ていても、常に日本の中小都市が頭にあった。工場は市場原理で建設され、稼働する。

規模が大きいことが有利であれば、どんどん大きくなって、それとともに街が大きくなっていく。でも、この街ではダメだとすれば、簡単に移転してしまう。工場がなくなった時に土壤汚染の問題だけでなく、その街は、どうやって生き残っていけるか、そういう状況で街をどうやって再生するかに関心あった。

ーその後、博士研究においてどのような困難があって、どう乗り越えてきたかについて教えてください。

正直に言って、なにかテーマを決めて書き出すのは結構勇気があることだった。ブラウンフィールド再生の現地調査には2011年頃から行っているが、テーマがしっかり決まっていたわけではなかった。研究では、三都市しか取り上げなかったが、実は20都市以上調査に行った。最初の2、3年は何を研究したいのかぼんやりしていて、ひたすら事例を追っていた。題材はブラウンフィールドであったが、大きな枠組みとしては東日本大震災や考古学遺跡と向き合ったルンビニプロジェクトを通して土地リスクという新しい概念にたどり着いたと思う。本格的に書き出したのは2013年の終わり頃かな。

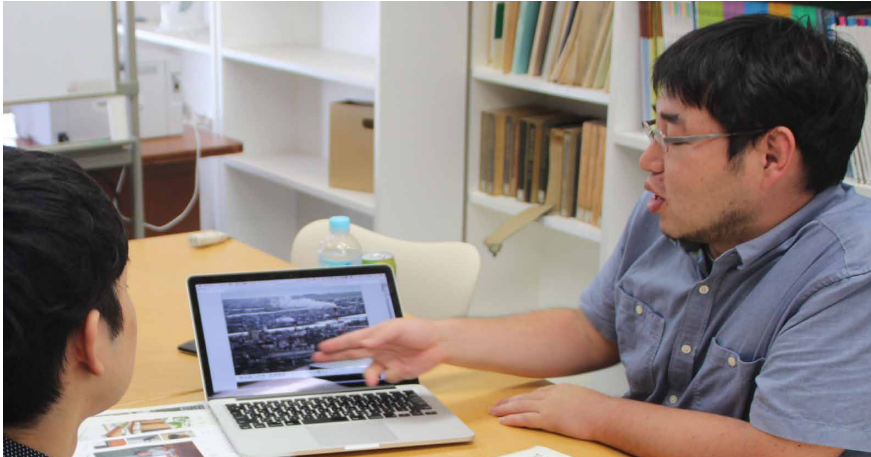
修士論文の時はブラウンフィールドだけの研究でよかった。ブラウンフィールドの再生の経緯を多少抽象化はするものの、ありのまま述べていった。だけど博論になると1章分にしかない。とてもくれた言い方をすると、マンゴージュースとヨーグルトを混ぜたら美味しいという発見が修論だとすると、少なくとも、乳製品と果物の相性を論じることが求められる(笑)。いちごと練乳もいける、チーズと干しぶどうも合う、でもパイナップルと牛乳は・・・。

今回の論文では、土地リスクという概念を新たに導入した。土地には土壤汚染以外にも自然由来、人為由来の様々なリスクがある。不安要素が全くない土地なんてなくて、なんらかのリスクとつき合いながらやっていかなければいけない。そういうリスクを都市計画も取り扱わなければならない。米国のブラウンフィールド再生で用いられた手法を、都市計画が土地リスクの概念をどのように吸収していったのかというプロセスとして捉えて、論を進めた。土壤汚染やブラウンフィールドだけでは適用範囲が狭い。ブラウンフィールド再生で得られた知見は、土地リスクへの都市計画の対応という意味ではどういうことなのか。修論のような固まりがいくつかあって、それらを抽象化してまとめることで議論を広げていくことが求められる。

他に大変だったのは、助教の仕事をしながら研究を進めたことだった。平日は時間が細切れになるので作業はできるが、じっくりと考えることはできない。そういう意味でじっくり考えることができる土日は貴重だった。

ー米国のブラウンフィールド研究の日本への応用についてどうお考えですか？

実は、日建設計で働いていた時に、日本のブラウンフィールドの調査の仕事も希望してやらせてもらっていた。これまで、日本では、土壤汚染は顕在化させると地価が下がるし、また責任の追求も難しいことから、土壤汚染の浄化に含めて実施し穏便に済ませていた。米国では、州法に基づいて汚染が出たら軽微なものも含めて、環境当局へ報告され公開される。結果として、工業都市では市街地に土壤汚染があることも、市民に受け入れ



▲出身地、八代の街並みについて懐かしげに話す黒瀬助教

られており、土地利用規制を併用すると土壤汚染対策も認められている。どちらがよいかははっきりとは言えないが、土壤汚染の情報があまり公になっていないことは長い目で見るとリスクなのではないかと思う。土壤汚染がある＝危ないと思われがちだが、どういう場所にどういうリスクがあるかを知っている方が、土壤汚染がないと思っていたのに実はそこかしこにあるという状況よりも安心なのではないか。

また、日本は土壤汚染のリスクを0か1かで判断している状況がいまだにある。定量的とか段階的に考えるというのが国民レベルで受け入れられていない。そういう考え方を受け入れていくことができるかどうか。身近に汚染があることが分かると、そこでどう自分が生活するかを考える。ある程度の量の土壤汚染があるという認識があった上で、どう安全に暮らしていくか、それを反映した計画が大事だと思う。土地リスクに対する考え方は、今後変わっていくと思うし、変わっていくべきだと思う。

すぐに研究を日本に応用するというよりは、まずはその土地にどういうリスクあるのかを共有していく必要があると考えている。最近では洪水のリスクや地震のリスクといった土地に関するリスクマップは公開され、その土地がどういうリスクを持っているのかをみんなで認識しあう、そういう状況がだいたいできていてのでは。そうして、土地に対するリスクが広く受け入れられるようになった時に、土壤汚染のリスクに対する理解も広がって欲しいと思っている。土地リスクと、開発したい、緑地が欲しいなどの社会的なニーズを調整するのは、やっぱり都市計画の分野が得意とすることではないか

と思う。

当初は、都市計画と環境行政がどう連携してきたかという視点で論文を書いてきた。でも、環境のニーズも社会のニーズも取り込むのが都市計画の仕事。最近の都市計画が、狭い意味の都市計画や開発事業のためのものになっているのではないかという危機感がある。都市計画基礎調査に、土地リスクを把握するような調査も組み込まれているのだが、実際は形骸化している。ブラウンフィールドや土壤汚染だけというより、土地に関するリスクに枠を広げて、それを都市計画にどう包含できるか、そういうことを、これからやれるとよいと思う。

都市計画という井戸の中では全然足りないことがたくさんあるという当たり前の認識が大切

ー都市工学の中に計画の他に環境という分野があって、どう協力あるいは住み分けていくべきでしょうか？

論文では環境行政と都市計画の連携を取り上げたが、都市計画は、環境とだけ連携していればいいわけじゃない。福祉や様々な産業などそれぞれの分野で、比べられない要素、優先順位、論理が各分野に独立してあると思うが、そういう全然違う要素、優先順位、論理を、特定の空間に落とし込んで、各分野の考え方を整理して統合していくのが都市計画の役

割だと思う。都市計画事業を論理付けするための都市計画から脱却し、そもそも都市計画が持っている、総合性みたいなものをもう一回再確認しなければいけないと思う。例えば、立地適正化計画は、環境もその1つだが、は福祉的なニーズや社会的なサービスとその圏域を空間計画と統合できるかが問われている。

都市工学科について言えば、計画コースと環境コースの演習を一緒にやりたい。演習は都市計画の中でも、交通、土地利用、都市デザイン、緑地計画など色々な分野の論理がある場所に落とし込んだときにどういう方向性を出すかという訓練だと思っている。その中には当然、水や資源、特に廃棄物も入るだろうし、都市環境全体のことを考えないといけない。河川沿いに遊歩道をつくっても、環境のことを考慮しなければ、水がくさいままという当たり前のことが起きてしまう。都市計画という井戸の中では全然足りないことがたくさんあるという当たり前の認識が大切だと自戒も込めて思う。

だから博士論文を環境系の先生にも査読していただきたいと思い、森口先生に副査をお願いした。森口先生は、一時期環境省にも在籍していたらして、僕は、アメリカの環境保護庁がどう都市に対する目線を変えたかをテーマにしていたので、日本の環境行政に詳しい人に意見をいただきたいと思っていた。実際に、環境保護に限らず、なぜ国と自治体で政策がうまくいったのか、いかなかったのか、というリアルな意見を頂けた。計画系の

論文を環境系の先生に審査頂いた事自体が珍しいと聞いてたので、これからもっと増えるといいなと思っている。

*

今回インタビューさせていただくにあたって、黒瀬先生のブラウンフィールド研究に関する論文を整理するだけでも大変で、先生がこれまで1つ1つ積み上げてきたブラウンフィールド研究の重みを感じるとともに、米国のブラウンフィールド政策の変遷および、具体的な取り組みの事例を知る、よいきっかけとなりました。

インタビューで特に印象に残ったのは、都市工学科について言及されていたことです。私が学部時代に在籍していた機械工学科は、ハード(4力学)から、ソフト(プログラミング)までまんべんなく学ぶので、機械情報工学科との垣根は低いと思います。そう考えると、計画系と環境系の壁はまだまだ高く、もっとお互いが何を学んでいるのかを把握すべきなのではないでしょうか。黒瀬先生には是非、計画コースと環境コースが一緒になって、都市の問題解決に取り組むような演習を今後実現させていただきたいと思っています！

お忙しいところ貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました！■

Information

6月のウェブ記事

産業跡地に思いを馳せる
2014年度報告書ついに完成!&新年度スタートへ
浦安オムニバス演習、中間ジュリーを終えました!
オムニバス演習神田編!
学部4年生歓迎会開催!
三国祭調査 その2

是非ご覧下さい: <http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

7月の予定

7/2 研究室会議
7/22,23,24 卒業研究中間発表
7/23 暑気払い(BBQ)



編集後記

高橋 舜

今月のインタビューでは、鈴木先生にお会いするにあたって約1年ぶりに母校を訪れました。先月の倉澤さん特集に登場した国吉先生など、学部のお世話になった方にお会いすると、改めて人間関係の大切さに気づかされます。今月から北沢先生特集が始まりました。この特集を通してこれからどのような出会いがあるのか、今から非常に楽しみです。2015年も既に半年が過ぎようとしており、時の早さを実感せずにはいられませんが、日々の出会いを大切にしていきたいと思っています。



▲これまで積み上げてきたBF研究

